

# 大西民子百首

北沢郁子 選



大西民子

死ぬ時はひとりで死ぬと言ひ切りてこみあぐる涙堪へむとしたり

生きてゆく幅を少しでもひろげたく昇任試験受けて見むとす

『まぼろしの椅子』

今は誰にも見することなきわが素顔霧笛は鳴れり夜の海原に

今朝は職場に帰りゆくわれに柚子匂ふ朝餉を母はしつらひくるる

かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は

われを伴ひて遁れむと言ふノアもなし裾濡らし雨の舗道を帰る

殻とちて疎める如き日のわれを不意に来し母に見せてしまひぬ

独り住みて潮鳴り高き冬の夜々三陸はシベリアの如しと思ひき

河口近き橋に待ちくれしかの夜々の像も影絵のごとく薄れつ

母校の教師となるを拒みて帰らざりしかの若き日より遠きふるさと

幼な子を背に攀ちさせてなごみいましまかり来て心深くぬくもる

完きは一つとてなき阿羅漢のわらわらと起ちあがる夜無きや

『不文の掟』

風つる火山灰地のただ中にまた人を降ろしバスは去りゆく

夢のなかといへども髪をふりみだし人を追ひるきながく忘れず

訪ね来て兎らと遊ばぬかといふ便り分教場は雪にうづもれてゐむ

はばたきて降り来しは壁のモザイクの鳩なりしかば愕きて醒む

夕占をこころむるがに仰ぐ空母さへ今の絆となるな

校正に倦みて思へば石工は石に潰ゆる夢なども見む

山の駅のながき停車に女ひとり向きを変へつつ麦踏める見ゆ

さまよへる心をしばし踟まりて見れば松笠に点る火のいろ

波瀾呼ぶたくらみにみづから溺れゆき見えぬブルーに水音うごく

前髪に雪のしづくを光らせて訪はむ未知の女のごとく

木耳を剥ぎゆく魔物見し日より日毎に烈し林の落ち葉

受診待つ乱座の中へ運ばれし煉炭の孔に視線あつまる

切り株につまづきたればくらがりに無数の耳のごとき木の葉ら

歩き疲れて土間に卵を生み終へし鶏もいつか視野を去りゆく

オリオンの位置もやうやく移ろふと春の疾風の夜々帰りゆく

煽られし楽譜を拾ふ時の間にドビュッシーもわれは逃がしてしまふ

丈長く切り来し菖蒲手向けつつ人に知られぬゆかりも過ぎぬ

象なき岩が夜毎に現れて水のゆくへを塞がむとする

棧橋の先までゆきて帰り来ぬかの夜の雪か肩にはららぐ

馬鈴薯を食ふる家族を描きしゴッホ笑ひころげて行く少女たち

ひび入りて伏せおく大き甕ひとつみどり鬼の声漏るる夜無きか

魔の谷のごとき夜更けの切通し火の粉散らして機関車は過ぐ

『無数の耳』

涙噴くばかりに翳るゆふべあり壁に貼りおくルオーのピエロ

葱の花しろじろと風に揺れあへり戻るほかなき道となりつつ

墓原のほとりに棲める年月に聞き分けて烈し鴉の言葉

ひとりでに鳴るオルガンも古りたらむ風の夜は思ふ山の校舎を

眠られぬ夜々に思へばみづからの羽根抜きて紡ぐよろこびも無し

降りやまぬ雨の奥よりよみがへり挙手の礼となすにあらすや

身を低めしのぎ得しことみづからの力となしてむつきついたち

ひとり身を照らし出されぬヘッドライトの穂先が棒の如く伸び来て

地に届くばかりの氷柱冴ゆるとふ帰り住めとは言ひ来ずなりぬ

あたためしミルクがあましいづくにか最後の朝餉食む人もるむ

囚はれの時間のなかに疑問符のキイ叩くとき強し小指も

夜もすがらわれに来てゐて雪の上に跡も残さず去りし何もの

円柱は何れも太く妹をしばしばわれの視野から奪ふ

遠き雲の地図を探さむこの町をのがれむといふ妹のため

水の輪のかさなりあひてつかのまに木蔭の椅子も濡れはじめたり

始まりも終りも知らず生きると小さく署名なすとき思ふ

『雲の地図』

『花溢れぬき』



狼煙あがる空はいづこかわぎはひは怖るる者にのみ来るといふ

降り来り餌をついばみて土にゐる雀にも及ばず死にたるものは

水道をとめて思へばかなしみは叩き割りたき塊をなす

読みさしの本はたと閉づるその音を最後に聞きて死ぬのかも知れず

死者に呼ばるといふこともなく病み古りて冬の苺の切り口青し

祝園は山峽の村少女われらの作れる手榴弾など如何になりけむ

守るほかなきひとりのくらし芽キャベツの一つ一つに十字入れつつ

小鳥らのささめきもいつかをさまりて隣の家の影に入る庭

足音の家をめぐるると聴きてをりわが歩みたる音かも知れず

もろともに声を挙げたるたれも亡し間遠になりて花火は終る

うなだれてゐては飛び得ず時ありて洞穴のやうに深くなる空

『野分の章』

死の日までせぐくまりものを書くならむ落ちてみひらく椿の花は

労働にすさむは言葉のみならずレモンの酸の舌先に沁む

つくづくと働きて来し女の手翡翠の珠も似合はずなりぬ

たれもぬわが家ながらさるさると机上さわだち待つ仕事あり

地下深く何祝ぎこのあらむ日か花サフランの湧き出でて咲く

滅多には死ぬぬ思ひす尾を垂れて歩むけものを真横に見れば

墮天使にはなり給ふなといふ言葉十年過ぎてをりをり還る

一本の木となりてあれゆきぶりて過ぎにしものを風と呼ぶべく

わかち持つ隠しことさへはろけきに若草山を燃す日近づく

昨日の如く思へど三十五年経ぬわれは二十歳の女教師なりき

うち揃ひ夕餉なしたる日のありき小さき額の絵のごとく見ゆ

夜の更けにものを食みみて兵糧の尽きなば果てむ戦の如し

簡潔にくらさむとのみ願ひ来て壁に貼りおくルオーも古りぬ

ゆく末に賑はひあれよ群書類従二十四巻今日は届きぬ

亡き人のたれとも知れず夢に来て菊人形のごとく立ちるき

帰り来むたれかみさうなこの夕べわれにひとすち修羅走りたり

振り向けば壁に立つ影声もなし流れ着きたる岸辺かこは

残業を終へて出で来てゆくりなく七夕の夜の賑はひに会ふ

瀬戸物の触れあふ音のしてゐしが唐突の死をわれは願へる

どのやうに死ぬわれならむ職業に深入りしたる悔い湧くらむか

とりたてて思ふならねど静かにてかなしきときに歌の生まるる

『印度の果実』

『風水』

山茶花の散りしくあたり用のなき鶏のごとく歩めりわれは  
在り馴れしひとりの夕餉卓上の塩と胡椒をかそかに振りて

五百枚の原稿用紙買ひ持ちていまだ紙なる重さを運ぶ

ひと世かけてわれは何せむ三代を経て出づるとふ黒薔薇のいろ

白骨しほほねとなりても遂げむことありや水に押されて水動きをり

もろびとに祈りはありて雨のなか茅の輪くぐりの賑はへりとぞ

仇を討つこと思ひにむきになりて仕事をしたる年月ありき

ファイナレに近づかむとし早まりて一個あがれる風船赤し

そのかみの文学少女波の音のテープを聴きて眠らむとする

『風の曼陀羅』

烏瓜熟れて点れり最後かも知れぬと思ふ夏も終はりて

乳母車にみどりごは居ずみどりごを抜きたる跡のふつくら窪む

階段まで灯をともし待ちをればひとりぐらゐは戻りて来ずや

妹のまだ居たるころ風呂釜に二列に点るガスの火ありき

縄とびの大波小波いつのまに縄のみとなりてまはりつづけぬ

迷ひつつ生きし荒れ野のいづこにも一縷の水はありし思ひす

朝々に活け直しをれば菜の花とわれといつしかいのちを競ふ

明日ありと思はれずあるわが前に光たばねて噴水あがる

来む世には誰にスカーフ編むらむかこの世に見にし人も忘るる

『光たばねて』

歌の表記・ふりがなは歌集に準拠しています。

な想像力と感受性によって、現実の生活よりも豊かな現実とする  
ことが出来たのである。

キャリア女性としての誰にも指を指されない活躍も現実であつたが、それと平行して、あるいはそれ以上に「歌」があつたことは、彼女の死去してしまつた今となつては「まぼろし」めくが、渾身の情熱をそそいだ四千余首に今も熱い心を聞く  
思ひである。歌は生きているという感が読者に迫ってくる。

北沢郁子（きたざわ・いくこ）「藍」編集同人

大西民子（1924—1994）は『まぼろしの椅子』から『風の曼陀羅』まで九冊の歌集を著し、遺著『光たばねて』

を加えると十冊の歌集を残したことになる。総歌数は四八九五首、歌集に採択されなかつた歌の数と思えば、生涯を歌に生きたその精進の跡に肅然と頭の下がる思いがする。

民子は聡明な女性だった。その上もの柔らかなで優しい人柄は、人に一目おかれながらも親しまれた。彼女が運命として甘受した肉親の喪失と、その結果としての孤独も、その豊か